

実習事前学習としての施設見学に関する検討 —夜間課程における2年間の取り組み—

播本 雅津子・白井 舒久・小田 史

A Study of Inspecting Institutions by Students as a Prior Exercise to their Practical Training
— Through Two-Year Trial Work for Night-Course Students —

Kazuko Harimoto Nobuhisa Shirai Fumi Oda

要約

開学3年目の本学夜間課程で、2003年度、2004年度に実施した施設見学について検討を行った。同じ教員チームにより2003年度に実施した内容を再検討して、2004年度に1年生で実施している施設見学を、各段階実習と同様に、事前から事後に向けての流れを明確にして実施した。また働きながら学ぶ学生の多い夜間課程の学生の生活や集団作りまでを考慮して、集団で見学を実施した。その結果、学生の負担が軽減されるとともに、一定の学習効果が得られた。

キーワード：夜間課程 施設見学 実習教育 学習効果

2004年12月13日受理

1. はじめに

本学は、介護福祉士養成校の指定を受けており、昼間課程のⅠ部（2年課程）と夜間課程のⅡ部（3年課程）がある。筆者らは、昨年からⅡ部の実習指導を担当している。本学は開学3年目であり、事前の教育計画に基づいて教育を行っているものの、細部に亘って突き詰めると見直すべき点があることにも気付く。ここでは、本学Ⅱ部が、実習事前学習の一環として実施している施設見学の取り組みについて述べる。

本学Ⅱ部の実習時期は、第一段階実習を1年次1月、第二段階実習を2年次9月、第三段階実習を3年次11月に行っている。施設見学は、実習事前学習として、第一段階実習より早い時期である、1年次7月に実施している。まず、

2003年度は前年度に実施されたものを引き継いで実施した。そして2004年度の取り組みについて見直し検討を行い、見学先や日程等に工夫をして施設見学を実施した。ここではこの2年間の取り組みとそこから得た教育効果と今後のあり方について述べる。

2. 施設見学実施の意義

(1)施設見学の目的

施設見学の目的は大きく分けて2点ある。一つ目は、各段階実習の進め方を体得するために、実習の事前学習、当日、事後学習、報告会、という一連の流れを体験することである。もう一つは、各段階実習では行くことのない施設を見学することによって福祉という分野を幅広く見

聞することである。

(2)夜間課程における実習指導の特徴

学生の年齢は10代から50代まで幅広く、20代から30代が中心である。ほとんどの学生が日中就労しており、そのうちの約半分は介護福祉関係の職についている。学生たちは、1講目が18時から始まるため、その少し前に短大に着き、2講目終了の21時10分を過ぎると急いで帰宅する、という慌しく忙しい生活である。

施設見学に関して考えると、昼間課程のⅠ部では半数以上が高校卒業後すぐに進学してきているため、1年生で福祉施設を見学することは、初めて福祉現場と接することになるが、Ⅱ部の場合はいくつかの施設に分かれる場合は、これまでに接したことのない分野の施設を希望する、ということになる。学生にとっての施設見学は福祉施設と接する貴重な体験というよりは、昼間に行われる授業のため、仕事との日程調整に悩む種となっている。Ⅱ部学生は、各段階実習は昼間の時間帯に実施するという事は承知で入学しているが、施設見学の実施については入学後に周知している。そのため、欠席する学生はいないものの、実施前にこのカリキュラムを歓迎しているとは感じられないことがひとつの特徴であると感じている。

3. 2年間の施設見学の実践

(1)夜間課程における実習指導体制と施設見学に対する考え方

2003年度の指導体制は、1年生28人、2年生21人の2学年に対して、教員4人がチームを組んで2学年とも実習指導に当たる体制をとった。チームを組んで1年目である2003年度は、実習指導のあり方や具体的な学生指導の方法についての共通認識を作り上げるために、話し合いを重ねた。その中で、施設見学については、初めての福祉施設体験として、できるだけ教員が学生の体験を共有できるようにしよう

という合意をした。そこで、2002年度は府下広範囲に及んでいた見学依頼先を本学所在地の堺市内に限定し、教員が同日に2箇所巡回指導することを可能にした。

2004年度は、1年生29人、2年生25人、3年生21人の3学年に対して、教員3人のチームで実習指導を行う体制となった。2003年度に築いた共通認識の下、担当学生や学年が増えたが1人減員となった体制ではあるが、3人は継続してのチーム構成で実習指導に取り組むこととなった。

施設見学については、学年暦作成時点から土曜日1日を候補に上げて見学先を変更することを検討した。2003年度から念頭においていた、教員が学生の体験を共有できることに加え、学生同士もできるだけ同じ体験のできる施設を候補に上げた。これは前述したように授業時間以外に交流時間が乏しい夜間課程の学生たちにとっては、人によって違う体験をするよりも同じ体験をするほうが、後の実習指導が進めやすいと考えたからである。

(2)実施時期および内容

①2003年度

本学Ⅱ部は、前期試験を7月末に実施している。2003年度は、事前学習を前期に3講実施した。施設見学は学生を3～4人ずつ8施設に分けて実施した。8施設の内訳は、知的障害者通所作業所4施設、知的障害者デイケア1施設、高齢者通所リハビリテーション2施設、身体障害者福祉ホーム1施設であった。

施設見学実施は前期試験終了日翌日から4施設2日間、翌々日から4施設2日間行った。見学先では、介護福祉現場の見学のみではなく、空き缶つぶしや皮細工などの作業を一緒に実施したり、利用者に対して、食事介助や入浴介助、排泄の介助などの直接介護を実施した。利用者との交流を作業中に行った施設もあれば、利用者が自らの障害について学生に語る時間をスケ

ジュールに組み入れたものもあった。

事後学習は 施設見学を全員が終えたその翌日に、夜間の授業時間のうち、1講を報告会準備に充て、2講目を報告会とした。学生への課題は、グループ報告書と個別レポートで、グループ報告書は冊子にして報告会資料とした。

教員の役割は、初日に同行したり、2日目の午後反省会に参加するなど、4人の教員が2箇所ずつ担当して巡回指導に当たった。

実施後の反省点として、日程を組む時点、すなわち学年暦作成時点で施設見学の計画を細部に渡って立てていなかったため、事前から事後に向けての一連の学習の流れの中に前期試験を挟むことになったこと、施設によっては重度重複障害者と接することになり、2日間では場に慣れたところで終わった感があり、時間が足りないと感じたところもあったこと、介護技術の習得が不十分なまま、直接介護に当たったことなどがある。

②2004年度

2004年度は、前年度の反省や、Ⅱ部の学生にとって時間が確保しやすい曜日などを学年暦作成時点から考慮して日程を決めた。事前学習を6月下旬から始め、施設見学実施日は7月中旬、その後に事後学習の時間を前期開講期間に確保した。見学する施設は、堺市に隣接する大阪市にある大規模な福祉機器展示場と決めた。この福祉機器展示場は、入場無料で、開館時間は誰でも入場し、見学をすることができる施設である。しかし、大阪市の臨海地域にあり、何か特別な機会がなければ学生が自主的に見学しているとは考えにくい施設である。

事前学習として、全体を6つのグループに分け、グループごとに施設のパンフレットを見ながら、重点的に見学したいスポットや、多様な福祉機器に対する興味や問題点について話し合いを行った。

見学は土曜日の午前中に施設前に集合し、全

員が2班に分かれて見学を実施した。事前に団体見学予約をしていたため、館内の見学時には現地スタッフによる案内や説明を受けることができた。見学コースが設定されており、その中に、高齢者疑似体験、車椅子移動体験、電動車椅子乗車体験など、様々な体験メニューがあった。団体見学時には時間制限があり、各部で2～3人しか体験できなかったものの、館内を約2時間かけて一通り見学することができた。そして、解散後は、見学時に体験できなかったところでそれぞれが自由に体験したり、事前学習を行ったテーマに則してパンフレットなどを収集したり、展示場のスタッフにさらに詳しい説明を聞くなど、グループごとに行動した。

見学から9日後の夜間に1講、事後学習として報告会を実施した。グループごとに事前に考えていた問題意識に沿って発表を行った。報告会資料は特に作成しなかった。発表時にOHPを用いるなど、各グループが発表の工夫をしていた。報告会での発表内容には、福祉機器それぞれのことだけではなく、値段の高さから、福祉機器を有効活用するためには経済支援が必要であることや、政治の仕組みを変える必要があるなど、幅広い視点からの意見が述べられていた。

2004年度の取り組みでは、学内での準備から報告までの全体を通して、事前学習、当日、事後学習の流れが明確になっていた。表1に2003年度と2004年度の取り組みの差異をあげた。

4. 考察

(1) 取り組みについて

2003年度の実習指導体制では学年暦作成から関わっておらず、2003年度の見学実習については、2002年度の方法を引き継いで実施した。そのため、その後に続く第一段階実習との関係を明確にすることができなかった。しかし、2004年度は、2003年度から同じ教員チームで

取り組んだため、1年間の実習指導全体を見通して見学実習の計画を立てることができた。そのため、見学実習の組み立てを、事前学習、実習当日、事後学習、報告会、個人レポート作成、という、第一段階実習と同じ形式を短期間で実施する形式に組み立てることができた。

(2)教育効果について

2004年度は、全員で同じ場所に行き、集団で行動したのち、グループで自主活動を行う、という形式をとったため、事後学習においてもそれぞれの意見や発表が学生たちに分かりやすいものになっていた。また、高齢者疑似体験、車イス体験、電動三輪車や電動四輪車の試乗など、学内では実施できない利用者の疑似体験を通して学んだことも多かったようである。報告会や個人レポートでは、福祉機器が精密になるほど値段が高く、必要な人が望むものを使える現状ではないことや、多種多様の機種について

個々人に応じた機種を選択することの難しさについて述べられていた。介護福祉は介護技術だけの問題ではなく、政治や経済と密接な関係があることも、学生自らの気づきとして発表されていた。福祉機器展示場で何を学び得るか、という点については学生たちも、それぞれの予測を超えた成果を得たようであった。

(3) 施設見学の設定方法について

開学時より第一段階実施前に、実習施設とは違う場所で施設見学を実施する、というカリキュラムがあったが、その実施の意義や位置づけを教員自身も明確にできずにいた。しかし、2003年度の見学実習の実施を経て、2004年度に見学場所や実施方法に工夫を加え実施したところ、一定の成果が得られたという実感を得るに至った。2004年度に実施した施設見学の形態は、表1で示したとおり、実施時期、全体の流れ、報告内容、共通の介護体験の差異からみ

表1 2003年度と2004年度の差異

	2003年度	2004年度
実施時期	<ul style="list-style-type: none"> ・前期試験実施翌日からの実習で、学生の体力的に負担が大きかった。 ・試験実施後のため、報告会后すぐに夏期休暇に入り、個別フォローができなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・前期開講中であり、授業の一環として位置づけしやすかった。 ・土曜日の実施で、勤労学生にとって日程調整がしやすかった。
全体の流れ	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習の時間は確保できたが、事後学習は報告会準備に追われた感があった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前学習、当日、事後学習と一連の流れが明確であった。
報告内容	<ul style="list-style-type: none"> ・8箇所に分かれたため、それぞれの学生の経験内容に違いがあるため、報告会での発表は、施設の概要の報告が半分以上を占めていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員で同じ体験をした後、テーマ別に報告したため、当日の学習に加えて、報告会でさらに学習内容が深まった感があった。
介護体験	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの施設で、直接介護を実施した。介護技術演習の授業半ばでの介護の実施であった。 ・第一段階実習で直接介護の実施がなかった施設では、学生に違和感が残った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・階段昇降機や、電動車イスなどの試乗や、車椅子で体験コースを移動するなどを行い、利用者疑似体験ができた。

て2003年度より効果があったと思われる。

5. まとめ

以上述べてきたように、第一段階実習事前学習としての施設見学に関する在り方について、Ⅱ部における2年間の取り組みを通して検討してきた。その結果明らかになった点は次のとおりである。

(1) 実習教育における導入の意義

施設見学の組み立てを、事前学習、実習当日、事後学習、報告会、個人レポート作成という第一段階実習と同じ形式を短期間に実施することが大切である。このことにより、学生は介護実習の一連の流れに見通しをもつことができ、その後の実習指導の授業への関心度も高まる。

(2) 共通の介護体験による学習効果

全員で同じ場所に行き、集団で行動し、グループで自主活動を行う形式を取ることによって、事後学習におけるグループ討議に基づく発表内容が深まり、意見交換も活発で、内容を共有し合うことができる。介護福祉が技術だけではなく、政治や経済等とも密接な関係があることへの学生の気付きが生まれ、広い視野に立った関連科目への学習意欲に繋がる効果がある。

(3) Ⅱ部学生の生活に配慮した施設見学

働きながら学ぶ学生が大半を占めるⅡ部の学生は、平日で昼間の実習の場合、仕事との調整が大変である。また、福祉現場で働いている場合も多くあるため、必ずしも福祉現場の施設見学が貴重な体験になるとは言えない現状である。2004年度に施設見学を1日にし、土曜日に実施したことは、Ⅱ部学生が仕事と学業を両立させるためのスケジュール調整における負担軽減と施設見学の目的に照らして効果的である。

(4) Ⅱ部学生のための施設見学先選定

夜間に学ぶ学生たちは、毎日時間割が埋まっております自由に使えない時間がないため、互いに意

見交換をしたり交流を深める機会が少ない。そのため、施設見学において同じ施設に集団で行くことがひとつの交流となる。施設見学先の選定においては、30人規模の集団が一度に見学が可能で、日常の仕事などでは出向くことのないような施設を念頭においておく必要がある。今後も2004年度の実施方法を継続する場合は、今回の見学先にこだわることなく、施設見学の目的が満たされる施設を新たに開拓していく必要がある。

6. おわりに

本稿は、本学のⅡ部における施設見学の取り組みを整理し、施設見学の在り方を検討したものである。今回の研究結果は、施設見学の在り方に関する一方法にすぎないが、取り組みについて一定の方向性を見出すことができたと考ええる。

本学は実習教育を重視している。そこで実習指導の内容や方法の充実のための研究は必要不可欠である。今後も、Ⅱ部の3年間を見通した一貫性のある実習指導内容の開発が必要である。この内容を具体的に豊かにしていくためには、実践を積み重ねながら常に検討していくことが求められる。今回の施設見学のあり方の検討はその一例である。

開学3年目であり、実践の積み重ねには試行錯誤の部分があることは否めないが、本学の教育理念である民主的で社会に役立つ介護福祉士を育成する教育実践の向上を図っていきたいと考えている。

(はりもと かづこ 本学講師)

(しらい のぶひさ 本学助教授)

(おだ ふみ 本学助手)